



学長メッセージ

鹿児島大学学長 前田芳實

鹿児島大学は、2007年11月制定の鹿児島大学憲章と2010年11月制定の鹿児島大学学生憲章、そして、2011年12月制定の鹿児島大学教育目標に基づき、日本で一番学生を大切に、地域活性化の中核的拠点として、国民の期待に応えることができる「進取の気風にあふれる総合大学」を目指しています。「進取の気風」とは、鹿児島が日本の変革と近代化を推進する過程で、多くの困難に果敢に挑戦する人材を育成してきた自主自律と進取の精神にちなんでいます。

大学憲章を具現化するための第2期中期目標は、2015年度の最終年度をむかえ、大学の特色を活かした、島嶼、環境、食と健康、水、エネルギーをテーマとしたグローバルな課題解決のための研究活動に挑戦するとともに、地域社会の活性化に向けて、社会に開かれたキャンパス環境整備をまさに推進しているところです。

臨床心理学研究科は、文部科学省特別教育研究経費プロジェクト「地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな『実践型教育プログラム』の開発」に2010年度から2012年度にかけて取り組みました。本研究は、鹿児島大学の趣旨に合うものと認められ、教育支援経費を経て、今年度は「地域支援プロジェクト」として経常予算化をいたしました。

教員と学生が協働して様々な地域に出向き、講演会・研修会・事例検討会・相談支援といったデリバリー方式によるアプローチを行うという斬新なアプローチは、伊佐市や霧島市といった拠点活動を中心として、専門職大学院としての地域貢献の可能性を具体的に示し、地域支援実践が行える臨床心理士の養成と卒後教育に関連した大きな教育成果をあげています。地域支援の窓口として司法政策研究科と共同で設置された「専門職大学院支援室」は、地域支援プロジェクトの拠点として発展してまいりました。

一方、臨床心理学研究科は、地域支援システムに優れた先進地調査の一環で、ストックホルム BUP やカロリンスカ大学 KIND といったスウェーデンの専門機関とも国際交流を継続しています。これは、鹿児島大学の行動目標である、国際社会の発展に貢献する行動力、国際社会の発展に貢献できる実践力等の養成に合うところです。

本プロジェクトは、全国の臨床心理士養成大学院のリーダー的存在である臨床心理学研究科の教育的根幹といえるものであり、実践を通じて地域の皆様の心の健康に寄与できますよう心から願っております。



研究科長メッセージ

鹿児島大学大学院臨床心理学研究科長
プロジェクト統括 松木 繁

臨床心理学研究科では、地域との連携を軸とした効果的な臨床心理学的援助システムの構築、さらには学際的な『実践型教育プログラム』の開発を目標に研究を重ねてきました。2010年度から2012年度までの概算プロジェクト研究、「地域支援の臨床実践と実務教育を架橋した新たな『実践型教育プログラム』の開発」では、18回の地域支援活動を行い、支援対象者も1,000名を超え、参加大学院生も54名にまできました。その成果については、日本心理臨床学会にて発表するだけでなく、年度報告書3冊、紀要論文6本にまとめ公開してまいりました。こうした実践に対して2014年度以降は学長からの教育支援経費を受け、さらなるプログラムの開発と研究を展開しております。

このプロジェクト研究は、臨床心理士養成に特化した専門職大学院である我が研究科の「地域文化を視野に入れた心理臨床ができる人材を育成する」という教育理念を具現化するものであり、今年度は臨床心理士養成大学院連絡協議会のFD研修会にて報告し、臨床心理地域援助のモデルとして高い評価を受けました。

今回の報告書は2014年度における本プロジェクトの内容をまとめたものです。その中では、これまでの地域支援の積み重ねの中で得たノウハウや知恵を事前学習・実施・事後学習のセット学習の中に組み込み、MICT(Mobile Information and Communication Technologies: 携帯情報伝達技術)を活用した実践型教育を体系化したプロセスを紹介しています。

具体的な内容として、第2章において本活動の「見える化対策」に繋がるパッケージ化の試みへの取り組みを中心に地域支援プロジェクトの特色ある取り組みを、第3章ではMICTを用いた実践的な学習とビデオ教材を活用したオンデマンド学習の紹介を、第4章では、地域支援活動に関する国際交流の紹介をしています。第5章では、今年度の活動実績をプログラム・グラフ・写真を交えながら紹介しています。昨年度に引き続き、今年度もできるだけ内容をより具体的に、また、視覚的に見てわかりやすいように写真を多く使用するなどの工夫を行っていますので、読者の皆様には読みやすく仕上がったと思います。

今後は、こうした実践を通して得られた成果を基に、洗練された臨床実践教育プログラムとして、それらのコンテンツ化・メニュー化・テキスト化へと発展させたいと願っておりますので、読者の皆様には忌憚の無いご意見をお寄せ頂ければ幸甚です。